

バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究

著者	吉田 康伸, 上田 実, 富田 公博, 田村 義男
出版者	法政大学体育研究センター
雑誌名	法政大学体育研究センター紀要
巻	14
ページ	1-9
発行年	1996-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00005062

バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究

The reserch in the ways they attack patterns in front
and back on volleyball

吉田 康伸 (法政大学)

上田 実 (法政大学)

富田 公博 (法政大学)

田村 義男 (法政大学)

(キーワード)	バレーボール	コンビネーション攻撃
Key word	Volleyball	Combination Attack
	バックアタック	攻撃パターン
	Back Attack	Attack Pattern

1. はじめに

現在のバレーボールにおいては、攻めに関しても守りに関しても、いかに相手チームに対して優位性を保ちながら、ゲームを進めていくかが勝利への最短距離である。その中でも最も多くの得点が記録されるアタック技術はゲームに大きな影響をおよぼし、それを防ぐブロック力、レシーブ力の向上にともない、より洗練されたコンビネーション攻撃によって、いかに相手ディフェンスを崩すかが勝敗の鍵を握っている。

とりわけ攻撃戦術はブロックとの関わりが深く、ルール改正によって、ブロッキングの際のオーバーネットが認められたことにより、それまで守備的要素の強かったブロックがより攻撃的な要素を兼ね備えることとなり、身長が高く、体力的に優れたチームが有利となったため、それに対抗するように、速攻コンビネーション攻撃や移動攻撃、時間差攻撃など数多くの攻撃技術、戦術が開発されてきた。

このようにして相手ブロックとの対応によって、攻撃の技術、戦術が進歩していく中で、バックプレーヤーがアタックラインの手前でジャンプをし、空間差（前方へ空中移動）を利用して攻撃を仕掛けるバックアタックが、攻撃戦術の一つとしてみられるようになってくるのである。

バックアタックは1960年の第4回世界選手権（ブラジル）において、ソ連男子チームが初めて試合で見せたが、まだレシーブボールがセッターに返らなかった時に使われる程度で、単発的なものであった。その後バックアタックをコンビネーション攻撃の中に取り入れ、完全な戦術の一つとして用いたのは、1984年のロスオリンピックで優勝したアメリカ男子チームであったが、それからバックアタックは各国で積極的に取り入れられ、有効な攻撃手段として定着していくのである。

そこで本研究は、国内のトップレベルである日本リーグ（現Vリーグ）におけるバックアタックが戦術としてどのように取り入れられ、実際にどういったパターンで使われているかに観点をおき、ゲーム分析を通して検討していくことにした。

2. 用語の定義

- ① トスの高さ、またはセッターの手からボールが離れてから、アタッカーが打つ瞬間までの時間によって各攻撃群を分類したものが表1である。

表1 各攻撃群の分類

攻撃群	テンポ	攻撃種類
速攻群	第1テンポ	A, B, C, Dの速攻
時間差群	第2テンポ	レフト、ライトの平行 ダブル 前セミ 後セミ 1人時間差 バックアタック (COMBINATION)
オープン群	第3テンポ	レフト、センター、ライトでのオープントス及びバックゾーンからのトス (バックアタックを含む)
その他		二段攻撃 (ツー攻撃) ダイレクトスパイク

- ② WBA (ダブルバックアタック)

一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛ける攻撃をいう。

- ③ F集

フロントのコンビネーション攻撃のうち、セッターを境にその前方、あるいは後方にフロントプレーヤーを集めるようにコンビネーションを組むことである。

- ④ F分

フロントのコンビネーション攻撃のうち、セッターの前方、後方にフロントプレーヤーを分散させるようにコンビネーションを組むことである。

- ⑤ FWQ

フロントのコンビネーション攻撃のうち、二人のフロントプレーヤーが同時に第一テンポ (速攻) の攻撃を仕掛けることをいう。

- ⑥ CONB出現率

バックアタックに関する出現率で、コンビネーション攻撃の中にバックアタックが組み込まれた全ての打数を、全体のコンビネーション数で割った割合のことである。

- ⑦ 打数出現率

バックアタックに関する出現率で、バックアタックの打数として出現した数を、全体の攻撃

打数で割った割合のことである。

3. 研究方法

① 標本

本研究の標本は、1992年度第26回日本バレーボールリーグ男子大会の予選リーグ戦のうち、VTR録画した22ゲーム、85セットと、1989年度第23回日本バレーボールリーグ男子大会の予選リーグ戦の13ゲーム、45セットである。

② 測定方法

本研究は、データを収集するために、ゲームを一度ビデオテープに録画し、後日再生して私案の記録用紙に記録し、集計した。測定した項目は以下の通りである。

- 攻撃種類の分類

攻撃の種類（コンビネーション攻撃）をフロントとバックに分け、フロントにおいては第一テンポ、第二テンポ、その他の3項目に集計した。

- ポジション別のバックアタック

ポジションごとにバックアタックの出現を集計した。

- 攻撃パターンの分類

一回ごとのコンビネーション攻撃について、その組み合わせによって攻撃パターンを分類した。以上の項目について、コンビネーション攻撃の出現率、打数の出現率、また攻撃パターンについては決定率を算出した。

4. 結果及び考察

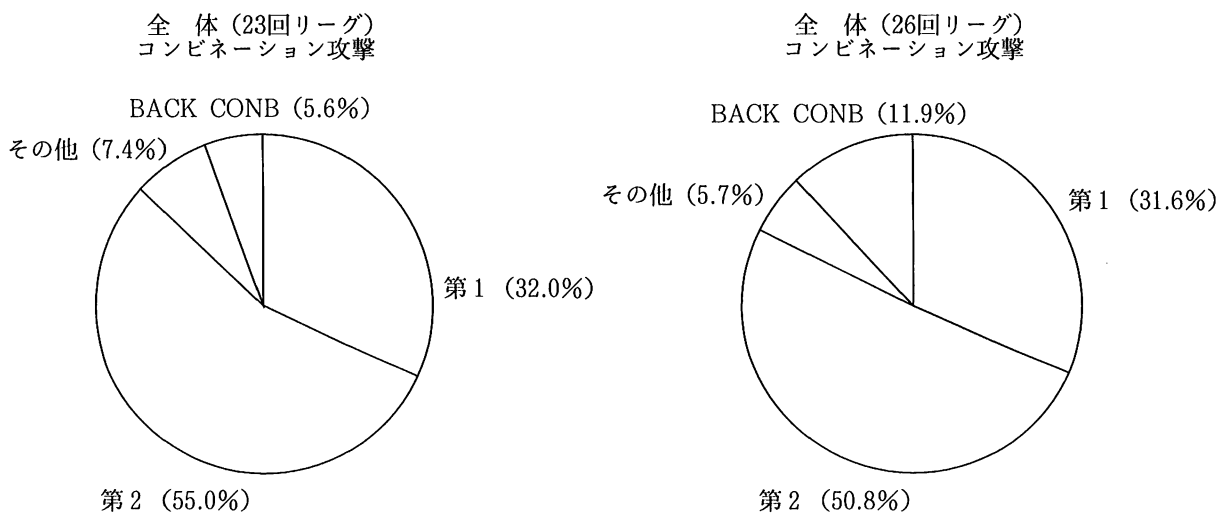


図1 攻撃種類

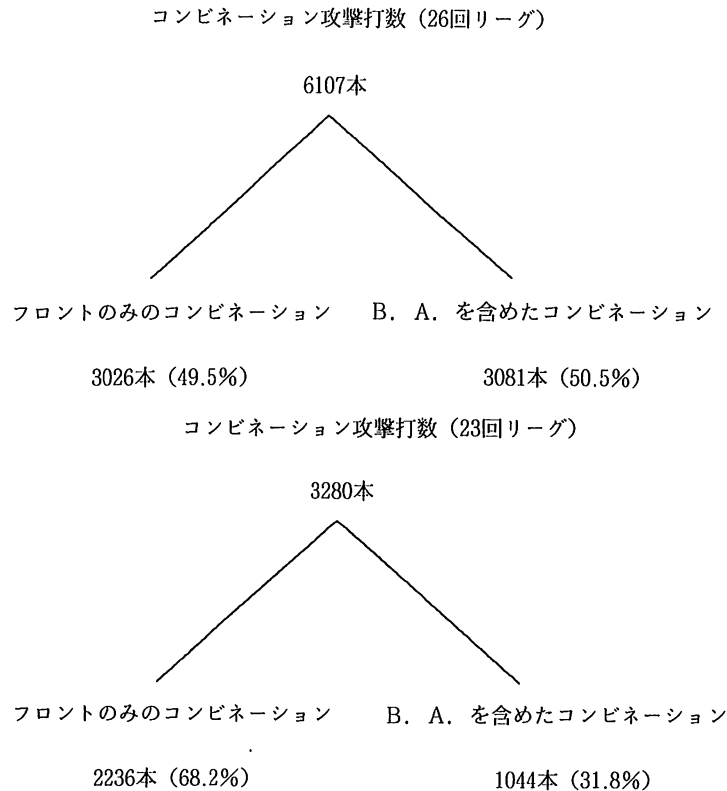


図2 コンビネーション攻撃

ここでは日本リーグレベルにおけるバックアタックの出現率や決定率などについて、'92日本リーグと'89日本リーグの参加チームが同じであったことから、この二つを比較検討しながら考察を進めていく。

1) バックアタックの出現率の各リーグごとの比較

本研究において、対象となった各リーグごとにおける全ての攻撃打数は、第26回日本リーグでは8415本であり、一方第23回日本リーグでは4730本であった。このうちオープン攻撃（第三テンポ）を除いたコンビネーション攻撃の総打数は、それぞれ6107本（26回リーグ）、3280本（23回リーグ）であった。図1は攻撃種類の打数出現率を示したものであるが、コンビネーション攻撃中、最も出現率の高かった攻撃は、両リーグとも第二テンポの攻撃であった。バックアタックの出現については、図1を見てもわかるように、三年間でほぼ倍近く増えていることが明らかになった。

また図2はコンビネーション攻撃をフロントのみのコンビネーション攻撃と、バックアタックを含めたコンビネーション攻撃に分類したものであるが、第23回日本リーグでは、バックア

タックを含めたコンビネーション攻撃が31.8%と約 $\frac{1}{3}$ であったのに対し、第26回日本リーグでは、50.5%と約半数がバックアタックを組み込んだ攻撃であった。このように三年間のうちに、バックアタックが多く使われるようになった要因は、以下のことが考えられる。

これまではセッターの対角には、守備面を優先としたプレーヤーを配置するのが主流であった。しかしここ数年では、攻撃面を優先としたプレーヤーを配置し、フロントの攻撃者が二人の場合に、その少ない攻撃者の数を補う目的でバックアタックを仕掛けるようになった。このようにセッターの対角に攻撃力のあるプレーヤーを配置するようになったチームは、第23回日本リーグが8チーム中3チームであったのに対し、第26回日本リーグでは8チーム中7チームであった。以上のようなことから、第26回日本リーグにおいては、フロントの攻撃者が二人の場合に、常時バックアタックを仕掛けられるようになったため、バックアタックが多く使われるようになったものと考えられる。

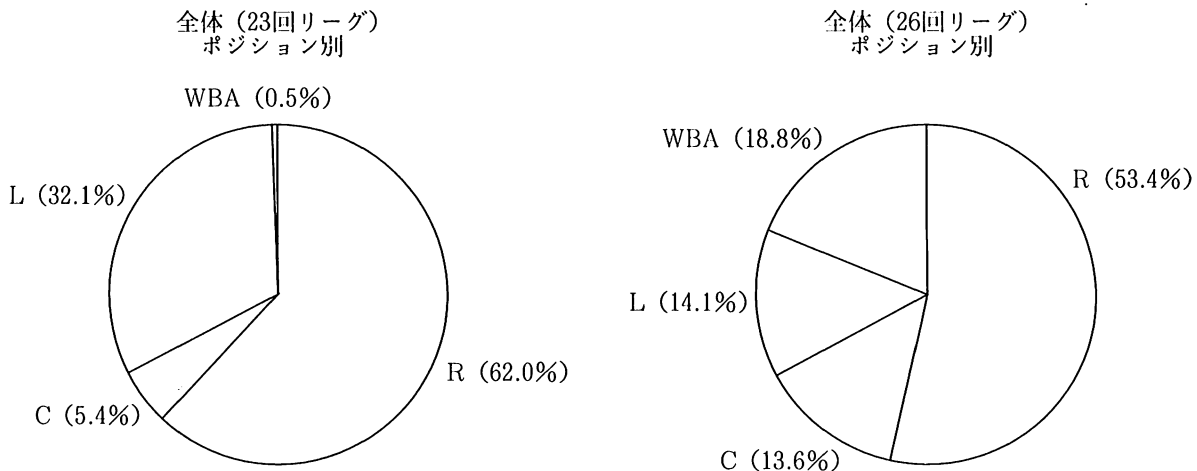


図3 ポジション別のバックアタック

2) ポジション別の各リーグごとの比較

コンビネーション攻撃におけるバックアタックをポジション別に分けたものが図3であるが、各リーグともにライトポジションからのバックアタックの打数が、半数以上(第23回日本リーグ・62.0%、第26回日本リーグ・53.4%)を占めた。このことは、フロントの攻撃の組み合わせがレフトとセンターを主体としていることが多いことから、レフトとセンターに相手ブロッカーを引きつけ、フロントの攻撃者のいないライトポジションからのバックアタックが多くなるものと考えられる。その他のポジションについては、センターからのバックアタックと、一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛けるWBAが、多く出現するようになった。

これは、センターからのバックアタックは、フロントの攻撃者が三人の場合に、フロントセンターの第一テンポの攻撃に絡めた使い方をすることが多く、またWBAは、フロントの攻撃

者が二人の場合に全て出現していることから、フロントとバックの攻撃者を合わせた四人攻撃が、多く出現するようになったことを示している。

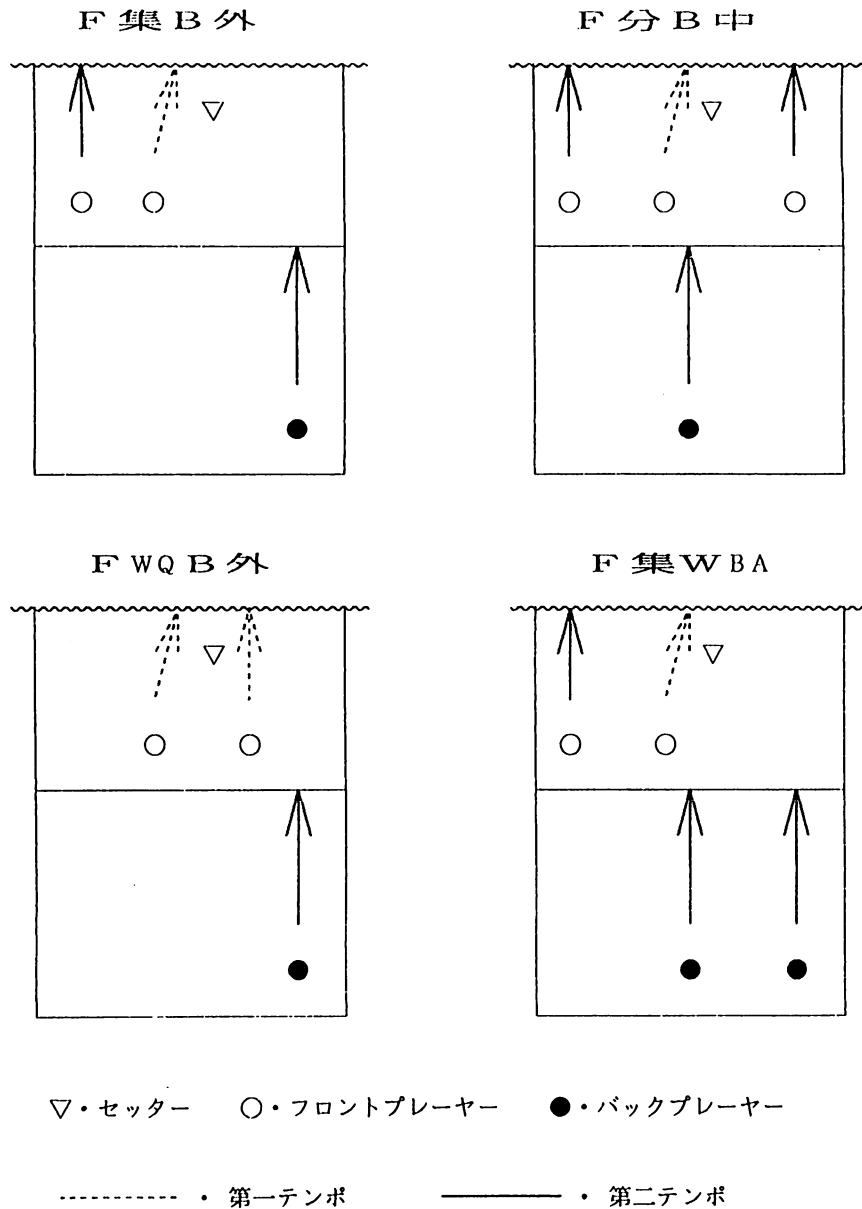


図4 攻撃パターンの種類

3) パターン別の各リーグごとの比較

次にバックアタックのコンビネーション攻撃を、パターン別に分けたものが表2、図5である。

バックアタックとフロントアタックを合わせた全てのコンビネーション攻撃のうち、フロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドから仕掛ける‘F集B外’が、

表2 パターン別のバックアタック（決定率を含む）

全体

26回リーグ	CONB	打数	決定	C出現率(%)	打出現率(%)	決定率(%)
F集B外	2078	477	241	67.4	65.5	50.5
F分B中	406	94	41	13.2	12.9	43.6
FWQB外	120	20	8	3.9	2.7	40.0
F集WBA	477	137	65	15.5	18.8	47.4
計	3081	728	355	—	—	48.8

23回リーグ	CONB	打数	決定	C出現率(%)	打出現率(%)	決定率(%)
F集B外	956	171	94	91.6	92.9	55.0
F分B中	66	10	5	6.3	5.4	50.0
FWQB外	20	2	1	1.9	1.1	50.0
F集WBA	2	1	0	0.2	0.5	0.0
計	1044	184	100	—	—	54.3

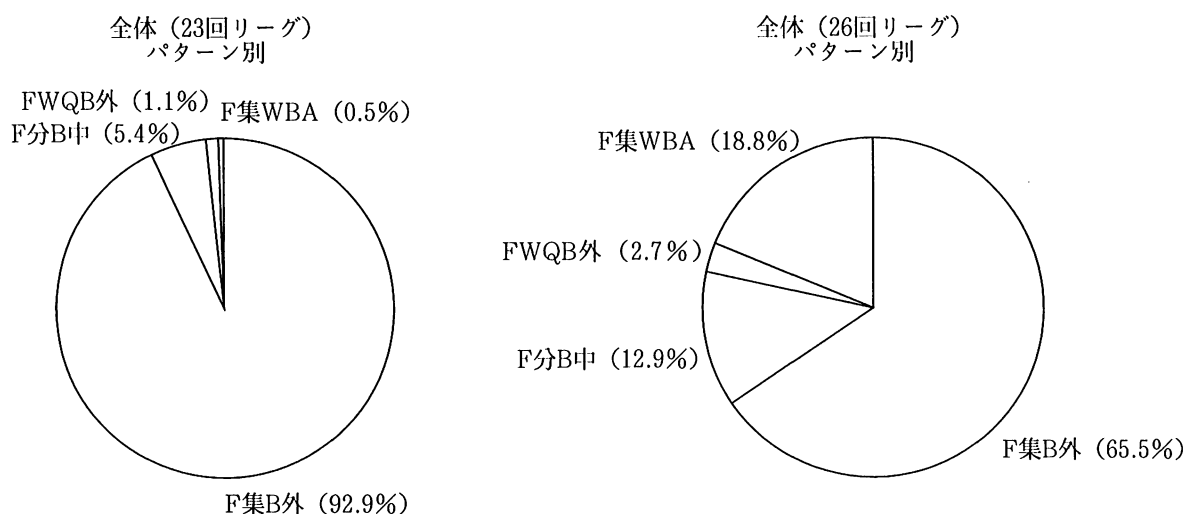


図5 パターン別のバックアタック

26回リーグ・67.4%、23回リーグ・91.6%であり、打数の出現率も各リーグそれぞれ65.5%、92.9%であった。

このようにフロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドに空間を作り、そこからバックアタックを仕掛けるというように、バックアタックを十分に生かすことのできる状態をフロントで組み立てながら、攻撃していくパターンの出現率が高かった。特に第23回日本リーグでは、このパターンが90%以上を占めており、その他のパターンはほとんど

出現していないことが明らかになった。

第26回日本リーグにおいて、次に出現率の高いパターンは、‘F集WBA’で15.5%（打数の出現率は18.8%）であった。このパターンはフロントの攻撃者が二人の場合のみ出現し、各チームによって全く出現しないチームと出現率の高いチームとに分かれた。

その他、フロントのコンビネーションがレフト、センター、ライトと分散して、そのバックゾーンからバックアタックを仕掛ける‘F分B中’は13.2%（打数の出現率は12.9%）であった。このパターンは、フロントの攻撃者が三人の場合に多く出現するパターンであった。

またフロントの攻撃者がダブルクイックに入り、その外側からバックアタックを打つ‘FWQB外’は最も少なく、3.9%（打数の出現率は2.7%）であった。

このようにパターン別でみると、フロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドからバックアタックを仕掛けるという、空間を使ったバックアタックのパターンと、フロントの攻撃者をセッターの前後に分散させ、第一テンポを仕掛けるポジションから、第二テンポであるバックアタックを仕掛けるという、時間差攻撃的に使ったパターンの二つに分けられ、その二つのパターンを合わせた、二つのポジションからバックアタックを仕掛けるパターンの三つに分けられると考えられる。このことは、スターティングラインナップにおけるセッターの位置や、そのチームのバックアタックを打つ攻撃者の人数、そしてフロントの攻撃者の人数によって変わると考えられる。

パターン別の決定率を見ると、両リーグとも出現率が高いにも関わらず、‘F集B外’が最も高く、逆に‘F分B中’、‘FWQB外’はともに全体の決定率より下回っていた。これは、‘F集B外’が空間差を使って相手ブロックを分散させるのに対し、‘F分B中’、‘FWQB外’は、フロントの攻撃とほぼ同じ位置でバックアタックを打つことで、フロントの攻撃をマークしていたブロッカーがもう一度バックアタックに跳び易く、‘F集B外’のようにあらかじめバックアタックをマークしていないとブロックに参加できないことはなく、フロントをマークしながらもトスを見てブロックに参加することができるため、ワンタッチをしてレシーブしたり、ブロックしたりすることができ、このことが決定率の低下につながっているものと考えられる。

5. 結論

以上のような結果から、コンビネーション攻撃におけるバックアタックの出現率は高くなり、またあらゆるポジションから出現するようになったことで、バックアタックを含めたコンビネーションのパターンが複雑になってきたことを示し、日本リーグレベルにおいては、バックアタックが戦術として定着してきたといえる。さらにほとんどのチームが、バックアタックを打つプレーヤーが二人以上になり、第23回日本リーグでは見られなかったWBAや、フロントの攻撃者が三人の場合

にバックアタックを仕掛けるという、フロントとバックのプレーヤーを合わせた四人攻撃も見られるようになった。したがってバックアタックをコンビネーション攻撃の中に取り入れ、幅広い攻撃をすることで、戦術的により効果的であることが実証された。

今後の日本リーグレベルでのコンビネーション攻撃におけるバックアタックは、出現率がさらに高くなり、その中でもWBAなどの四人攻撃といった、複雑なコンビネーション攻撃が多く出現するものと予想される。またこれらのコンビネーション攻撃が定着することにより、バックアタックはより決定力のある攻撃となり、ゲームの勝敗に与える影響が大きくなっていくであろう。

バックアタックを使う目的が、フロントの攻撃者が二人の場合に、その少ない攻撃者の数を補うというものから、今後はその目的以外に攻撃の質を高める目的でバックアタックが使われていくものと予想される。

本研究は、日本リーグレベルのチームにおけるバックアタックについて、出現率やポジション別の出現頻度について調査し、それをもとにどのようなパターンでコンビネーション攻撃が行われているのかを検討してきた。今後もこれらの調査を継続し、バックアタックが戦術としてどのように変化していくのかを検討する必要があるといえる。

参考文献

- (1) A・セリンジャー：「パワーバレーボール」ベースボールマガジン社
- (2) 福原祐三 ほか：「バレーボールのゲーム分析―サーブレシーブからの攻撃―」
日本体育学会第30回大会号
- (3) 池田久造：「バレーボール ルールの変遷とその背景」日本文化出版
- (4) 松平康隆：「バレーボールの戦術」講談社
- (5) 都沢凡夫 ほか：「バレーボールにおけるゲーム分析」
日本バレーボール協会研究報告書第4巻
- (6) 新谷宗一：「バレーボールに関する理論的研究―Tacticsの構成要素より―」
日本体育学会第34回大会号
- (7) 朽堀申二 ほか：「バレーボール」泰流社
- (8) 吉田清司 ほか：「バレーボールのゲーム分析―'84女子4カ国対抗におけるポジション別
攻撃パターンについて―」日本体育学会第36回大会号
- (9) 吉田雅行 ほか：「バレーボールの各ポジションの勝敗に影響を与える技術」
日本体育学会第34回大会号
- (10) 吉田敏明 ほか：「バレーボールにおける勝敗に影響を及ぼす技術」
日本体育学会第36回大会号